

## 鮑之蕙の生涯とその紀行詩

蕭, 燕婉  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9631>

---

出版情報：中国文学論集. 29, pp.72-88, 2000-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 鮑之蕙の生涯とその紀行詩

蕭 燕 婉

はじめに

鮑之蕙（一七五七～一八一〇）、号は菫香、字は仲姒。江蘇丹徒の人である。彼女は袁枚の女弟子の一人であり、著に『清娛閣詩鈔』六巻がある。同書の巻頭には、吳錫麒・法式善・吳烜・李錫恭・鮑之鍾の序文があり、また巻末には、諸家の題辭・評跋が附されている。日本では静嘉堂文庫に所蔵が確認される。

『清娛閣詩鈔』には合計四百七首の各体の詩が収録されている。その中で何よりも特筆に値するのは、紀行詩（旅路の出来事、見聞、感想等を記した詩）と目される詩がおよそ百五首を数えることである。これらの詩作は、彼女の文学の特徴として、女流文学史の上において重要な意義を持ち、また当時の女性の生活や精神の軌跡を探る上でも貴重な資料となっている。

以上のような見地から、小稿は今日では殆ど顧みられない女流詩人鮑之蕙について、その生涯を概観し、その紀行詩の特色について分析し紹介しようとするものである。同時にそれらの詩作を通して、彼女の旅行の機会はどのように得られたのか、そして旅の目的は何であったのか、どのような態度で自然と親しんでいたのか、といった問題について考察する。それらの作業を通して、清代における上流階級の女性の活動や生活、及び文学創作の実態について、より具体的な資料を提供し、清代の女流文学史に新知見を加えることが本稿の目的である。

鮑之蕙は士大夫階級においても第一級の名門の娘であった。父は鮑臯（一七〇八—一七六五）、字は步江、号は海門。禽魚花鳥の画を善くし、尤も詩賦を以て高名であった。乾隆元年（一七三六）、鴻博に挙げられるも就かず、著に『海門詩鈔』がある。母は陳蕊珠、字は逸仙。『丹徒臯志』に「陳蕊珠、……八九歲能誦父書、久之通經傳、文選、尤工詩（陳蕊珠、……八、九歲にして能く父の書を誦し、之を久しうして経伝・文選に通じ、尤も詩に工みなり）」とあることから、鮑之蕙の母は、幼少期より詩に長じた閩秀詩人であったことがわかる。なお、陳蕊珠には娘の鮑之蘭・之蕙・之芬と合刻の詩稿があり、これを『課選樓合稿』という。「課選樓」とは、鮑臯の蔵書樓の呼称である。<sup>1</sup>『清娛閣詩鈔』卷二鮑之蕙の「雨中有感」詩に、「選樓唱和何時續（選樓の唱和 何れの時にか続がんとある。ここから、彼女が常に父の書齋で母と一緒に詩を作ったり、読書したりしていたことが窺えよう。

このような書香馥郁たる家庭で育てられた鮑家の娘たちは、父母の温かい薫陶の下、広闊な知識の領域に踏み入り、早くから詩人としての素質を花開かせていた。鮑之蕙は次女で、長女の之蘭（畹芬）、季女の之芬（浣雲）と共に三姉妹そろって閩秀詩人であった。<sup>2</sup>之蘭の『起雲閣詩鈔』四卷と之蕙の『清娛閣詩鈔』六卷、及び之芬の『三秀齋詩鈔』二卷には、光緒八年（一八八二）の合刻本があり、これを『京江鮑氏三女史詩鈔』という。本稿ではこのテキストを使用する。なお、以下本文中『詩鈔』と略称する。

鮑之蕙の兄鮑之鍾は字は論山、号は雅堂。戸部郎中を授けられた。著に『論山詩鈔』がある。要するに、彼ら一門は「江左風雅、萃於一門（江左の風雅、一門に萃れり）」と称されるように、<sup>3</sup>当時の江南でも指折りの文学一家だったのである。

鮑之蕙は十五歳にして、同郷の張鉉（舸齋）に嫁した。張鉉は性格が倜儻（物事に拘束されないさま）で、詩に工みであり、遊覧を喜んだ。<sup>4</sup>彼らはしばしば、伉儷うるわしき夫婦能詩者の代表として名を挙げられている。<sup>5</sup>『詩鈔』には、鮑之蕙が夫と共に作った「聯句」（複数の人間が、数句ずつ作ったものを繋げて、一首の詩を完成させ

るといふ詩の形式)の作品が十一首も残されている。夫婦の間で、これだけ多くの「聯句」による詩作が行われているのは、互いの深い心のつながりと、詩文の素養とがあつて初めて可能となるものである。

総じて言えば、鮑之蕙は「福慧人間已占多(福慧 人間に已に多きを占む)」と言われる通り、人々から賞賛され羨望されるような、優雅且つ裕福な生活環境の中で、詩文と学問の研鑽に精力を傾けた上流階級の一婦人であつたのである。

二

鮑之蕙はいつ袁枚の弟子となつたのか。このことを考証する前に、彼女がなぜ袁枚の弟子になろうとしたのかについて、まず検討してみよう。

鮑之蕙は非常な読書家であつた。鮑達は『詩鈔』の評跋において次のように述べている。

姑母中年以前、未持家政、手不釋卷、凡課選樓、清娛閣兩家藏書、繙閱殆遍。

姑母は中年以前、未だ家政を持せざるに、手より巻を積かず、凡そ課選樓・清娛閣兩家の藏書は、繙閱すると殆ど遍ねし。

中年以前、鮑之蕙はひたすら読書に力を注いだ。そのような彼女は、自分の詩作に対する評価を常に気にしており、名を成そうとする願望を心中に潜めていたようである。例えば、彼女は「三十未能名一技、半緣兒女半才庸(三十にして未だ一技に名ある能わざるは、半ばは兒女なるに緣り 半ばは才庸なればなり)」と詠じている(『詩鈔』卷二「春暮閒居」詩)。これは極めて謙遜した措辞ではあるが、己の詩才をどうにかして認められたいとする彼女の心情をも強く読み取り得るものである。また彼女は「自分不才無過想、停鍼閒作硯田農(自ら分るに不才なれば過ぎたる想い無し、鍼を停め閒かに硯田の農を作さん)」とも述べている(『詩鈔』卷二「春日園居有感」詩)。この詩句は、自己の「不才」への嘲笑と、一方で作詩に没入する自己を進んで肯定しようとする気持ちとを共存させたものである。しかしどちらかと言えば、やはり後者の心情の方がより強いことは疑いないであろう。このよう

な詩を詠じた鮑之蕙の向上心は頗る高かったと思われる。したがって、彼女が当時の文壇の大家袁枚に入門したいと願ったのは実に自然な衝動として受け取れよう。

『小倉山房外集』巻八の「清娛閣合刻序」には、袁枚が鮑之蕙と初めて会った経緯について、次のように書かれている。

僕桑榆之景暮矣、通家之宜久矣。初與步江居士韓孟聯交、繼與雅堂省郎紀群作友。今歲再遊天台、又得見蔡氏文姬、劉家快婿。

僕 桑榆の景暮にして、通家の宜み久し。初め步江居士と韓（愈）・孟（郊）のごとく聯交し、繼いで雅堂省郎と紀・群（三国魏の孔融と陳紀・陳群父子との交友）のごとく友と作る。今歲 再び天台に遊び、又 蔡氏の文姬、劉家の快婿に見ゆるを得たり。

袁枚は、乾隆五十七年（一七九二）に再び天台に遊び、その帰途、はじめて鮑之蕙と張鉉に出会った。時に袁枚七十七歳、鮑之蕙三十六歳であった。張鉉夫婦は、彼に会えた光栄と喜びの心情を伝えるために「贈隨園太史」詩二首を作り、袁枚に贈った。更に同年の秋、袁枚は『清娛閣合刻』の序文を書き、彼らに賜った。この『清娛閣合刻』は、張鉉・鮑之蕙夫婦の作品集であったはずだが、おそらく印行はされなかったと見え、今日には伝わっていない。今日見ることのできる『清娛閣詩鈔』六巻は、殆ど鮑之蕙の作で占められている。

なお、以上の袁枚の記述には、袁枚が鮑之蕙の父鮑皋、兄鮑之鍾とも長い間親しく交際していたことが示されている。この事實は、『隨園詩話』に鮑皋・之鍾の詩、及び袁枚と彼らとの交遊を語るエピソードが数多く収録されていることから裏付けられるが、袁枚は鮑氏一門の人々とも、すでに相識の間柄にあったのである。

鮑之蕙は袁枚の弟子になって以来、詩を介しての交際を開始する。乾隆六十年（一七九五）、鮑之蕙は張鉉と共に「祝隨園先生八十壽、同舸齋聯句」という詩を作り、袁枚の八十歳の誕生日を祝った。また、袁枚もかつて盆栽の古柏と、同じく荔枝、そして『隨園全集』を彼女に送ったようで、それに対する彼女の返礼の詩が残っている。

嘉慶二年（一七九七）、袁枚の死に際して、鮑之蕙は「隨園先生輓辭」二首（『詩鈔』巻三）を奉じ、その死を深く哀惜した。

### 鮑之蕙の生涯とその紀行詩

因みに鮑之蕙は袁枚を師と仰いだだけでなく、当時の女流文学の理解者であった王文治（夢楼）とも親しく交わることによって、自分の才能を伸ばすことに努めていたようである。『詩鈔』巻五の「王夢樓先生輓辭」に彼女は「遽聞歸淨土、誰復指迷津（遽かに浄土に帰すと聞く、誰か復た迷津を指さんや）」と詠じている。このような内容から、彼女が王文治にも教えを請い、指導を受けていたことが窺えるであろう。要するに、鮑之蕙の周囲には、父や兄や夫、師の袁枚・王文治のような指導者に恵まれ、さらに王芑孫・趙懷玉・陸繼輅・劉嗣綰など乾嘉の名士たちとの交際も加わって、彼女の文学的成長を助けることになったのである。

三

古来、旅に出るのは圧倒的に男性であった。しかし、女性たちもまた折にふれて旅を経験したことは、多くの書籍に記される通りである。鮑之蕙以前にも、女流詩人たちが紀行詩を詠んでいる例はしばしば散見される。明の鍾惺編纂の『名媛詩歸』には、宋明時代の閨秀詩人の書いた紀行詩や叙景詩が、多数収められている。

彼女らの旅の目的はもとより様々であった。寺廟仏閣への参拝を兼ねた名所巡りのほかに、父や夫に従い、その任地に赴く才媛たちもいた。例えば、明末の王鳳嫺は、夫張本嘉が江西宜春県令の三年間の任期を終え、故郷の浙江嘉興まで共に帰る途中に「東歸記事」を著している。そのほかに、よく知られている例として、明末呉県（註）の徐媛は、夫の范允臨が雲南の兵部主事に任ぜられたために、夫と共に滇南に寄寓している。清代浙江錢塘の林以寧は、御史である夫の錢肇修に従い、まず洛陽の任地へ行き、それから北京に身を寄せている。この間に彼女が残した紀行詩の数は少なくない。その作品は多く『國朝閨閣詩鈔』に収められている。

矢沢利彦氏の『西洋人の見た十六〜十八世紀の中国女性』には、当時の女性の活動について、次のような指摘が見られる。

纏足によって女性は非活動的になることは確かである。しかしそのことがただちに女性を社会から隔離することにはならない。歩行の能力を完全に奪ってしまうわけではないから、外出する意志さえあれば、いくらでも

外出することは可能である。

言うまでもなく、西洋人の観点から見れば、中国社会における婦女の籠居は特に目を引く現象であったに違いない。しかし、纏足の束縛と社会からの隔離という厳しい習俗の中に生きた明清時代の女性たちは、かかる困難にもかかわらず、決して家の中にだけ閉じこもっていたのではなく、世間を見聞することを通して、あらためて自己を発見してもいたのである。これらの紀行詩は、彼女たちの「自分史」であったといってもよいであろう。

さて、鮑之蕙はいったい何歳の時、どのような状況のもとで、はじめて旅に出たのか。この点について、『清娛閣詩鈔』の鮑之鍾の序文には、次のように語られている。

自歲乙酉、先徵君捐館舍。戊子春、予闕服補官京師。逾年、謀迎養。……菑香偕季妹滄雲、以壬辰五月、奉太恭人至京邸。

歲乙酉（一七六五年）に自て、先徵君 館舍を捐つ。戊子（一七六八年）の春、予 服するを闕め、官を京師に補う。年を逾えて、迎え養わんことを謀る。……菑香は季妹滄雲と偕に、壬辰（乾隆三十七年）五月を以て、太恭人を奉じて京の邸に至る。

鮑之蕙は乾隆三十七年（一七七二）、十六歳の時に、母親や妹と共に兄の北京の官邸にやって来ていた。『詩鈔』巻一の「舟次天津登望海樓」・「玉簾橋觀荷」・「九日登陶然亭」・「城南看菊」・「法源寺看花」など五首の詩は、彼女が故里の江蘇を発つて、北京に滞在していた頃の作である。ここでは、その中から「舟次天津登望海樓」詩を掲げて見ることにしよう。

帆趁西風溯急流	帆は西風を趁うて 急流を溯り
名藍弭棹暫淹留	名藍に棹を弭めて 暫く淹留す
銀濤晴灑松門雪	銀濤 晴れたるに灑ぐ 松門の雪
黃霧晨開海國秋	黃霧 晨に開く 海國の秋
樓影暗含鮫蜃氣	樓影 暗かに含む 鮫蜃の氣
鐘聲遙落鳳麟洲	鐘聲 遙かに落つ 鳳麟洲

鮑之蕙の生涯とその紀行詩

登高回望江南遠

高きに登り 回望すれば 江南遠く

一髮青山雁外浮

一髮の青山 雁外に浮かぶ

まず第一句目は舟が川をさかのぼるスピード感、及び道中の危険を描写している。遠く旅をした経験のない少女にとっては、恐らくすべての体験が珍しく、また驚きであったに違いない。そして、天津の望海楼に登った彼女の目に映ったのは、銀色に輝く波、松葉に積もる白い雪、波止場を覆う黄色い霧であり、耳に入ってきたのは、遠くから伝わる鐘声とさざ波の音であった。この詩は彼女の鋭敏な感覚を駆使し港市天津の特徴が見事に把握されている。なかでも、頷聯・頸聯の緊密な対句は、彼女の詩才の非凡を窺うに十分であろう。また、末尾の一句「一髮青山雁外浮」は、彼女が心酔していた蘇軾の「澄邁驛通潮閣」詩の「青山一髮是中原」の句を踏まえたものである。彼女は眼前の遠望によって、遠ざかってゆく江南への郷愁を心の中に呼び覚まされたかのようにである。

この旅を終えてのち、鮑之蕙が再び大きな旅に出たのは、彼女の中年以降のことであった。彼女の紀行詩は、その年齢別に分類すると、年代不明十三篇を除いて、前述の五篇を加え、二十歳代の五篇、三十歳代の二十四篇、四十歳代の五十二篇、五十歳代の六篇となる。この数からも明らかのように、その中では、四十歳代の紀行詩が全体の過半数を占めており、圧倒的に多いことに注目したい。

なぜ四十歳代の旅が最も多いのか。それは彼女が「中饋暫交新婦任、好隨漁艇泛烟波（中饋 暫く交せて、新婦に任じ、好んで漁艇に随いて烟波に泛かぶ。）」（『詩鈔』卷三「自題烟波共泛小照」其一）・「塵事暫交新娶婦、征衣旋裏舊遊裝（塵事 暫く交す新娶の婦に、征衣、旋ち裏む舊遊の装い。）」（『詩鈔』卷四「舸齋小住攝山招予同遊、征衣口占一律」詩）と詠じていることから、おのずから明らかであろう。つまり、これは社会的に見れば、子育てを終え、家庭での女の仕事を嫁に委ねた後の女旅であったと言える。このころ、彼女は夫張鉉に連れられ、江蘇省江寧県の摂山、杭州の西湖、及びその附近の龍井、六和塔、六一泉、靈隱寺などの名所を巡り歩き、多くの紀行詩を作り、風景に陶醉し、物見遊山の楽しみを尽くしていた。以下は、彼女のこの四十歳代の作品を中心にして、その紀行詩の特徴を探ってみたい。



まず、『詩鈔』卷四の「將遊攝山晚泊金山寺登塔」詩を見てみよう。

- 1 夕陽欲下江波紫  
夕陽 下おちんと欲して 江波 紫なり
- 2 一棹沿江溯葭葦  
一棹 江に沿うて 葭葦を溯る
- 3 舟人笑指攝山遙  
舟人 笑って指さす 攝山の遙か
- 4 咫尺鼇峰當面起  
咫尺の鼇峰 当面に起こる
- 5 峰根江底插半天  
峰根 江底より 半天に挿し
- 6 一枝靈塔搖秋烟  
一枝の靈塔 秋烟に揺らぐ
- 7 絶頂孤高礙飛鳥  
絶頂 孤高にして 飛鳥を礙さまたげ
- 8 金鈴自語風當顛  
金鈴 自ら語る 風当に顛すべしと  
手に稚子を携えて 忽ち冲拳すれば
- 9 手攜稚子忽冲舉  
江妃は珮を解き 馮夷は鼓す
- 10 江妃解珮馮夷鼓  
翱翔して 真に扶桑に到らんと欲するも
- 11 翱翔真欲到扶桑  
指点すれば 猶お能く呉楚を辨ず
- 12 指点猶能辨呉楚  
岷源 万里 金陵に下り
- 13 岷源萬里下金陵  
石城 鬚鬚として 寒潮 平らかなり
- 14 石城鬚鬚寒潮平  
紫金 牛首 総て培塿にして
- 15 紫金牛首總培塿  
瀾漫たる 一抹の蒼烟 横たわる
- 16 瀾漫一抹蒼烟横  
下方より 鐘魚(かねのね) 晩を相促し
- 17 下方鐘魚晚相促  
高吟 且らく住めて 雲を凌たぎて 躡たる
- 18 高吟且住凌雲躡

鮑之蕙の生涯とその紀行詩

- 19 海霞入袂亂飄紅 海霞 袂に入りて 乱りに紅を飄たふわせ  
 20 空翠礙眉輕掃綠 空翠 眉を礙さげて 軽く緑を掃う  
 21 御風忽復下蓬萊 風を御して 忽ち復た 蓬萊に下れば  
 22 紺殿蘭堂次第開 紺殿 蘭堂 次第に開く  
 23 臨行更欲恣幽討 行に臨んで 更に幽討を恣にせんと欲し  
 24 青絲纜解孤帆催 青糸 纜を解きて 孤帆 催す  
 25 舟人打鼓乘潮去 舟人 鼓を打ちて 潮に乗って去り  
 26 淡月橫江渾欲曙 淡月 江に横たわり 渾て曙あけんと欲す  
 27 推篷四顧但漫漫 篷を推して 四顧すれば 但だ漫漫として  
 28 塔在銀濤最高處 塔は銀濤の最も高き処に在り

時は秋。冒頭四句は船上より撰山を認めたときの様子を述べる。そして第五句以降彼女は、眼前に展開される風景を描写してゆく。夕映えの中にそびえ立つ寺塔、山峰の飛鳥、塔軒に揺れる鈴の音とその描写は次第に微細なものに及んでいる。第三段、九句目以降は雲霞に乗って飄然として天に昇るような快感を表現している。なかでも「江妃解珮馮夷鼓」と述べているのは、神女「江妃」と水の神「馮夷」の伝説を踏まえることによって、恍惚幽遠たる境地を作り出したものである。第四段、十三句目以降の十二句は、天界からの鳥瞰によって、長江のほとりの山と空の変化多端なさまを捉えている。最後に第二十五句、舟をこぐ人が太鼓を打ち鳴らし、旅の陶酔が覚めると、広々とした水面に夜は明け、金山寺の仏塔がすぐ目の前に立ち現われている。

この詩を一読すれば、日常生活からの解放感に浸りつつ、旅行中に接した山水そのものを積極的に楽しもうとする彼女の姿勢が感じられるであろう。全篇の描写は、現実の実景から空想の世界に移ったあと、再び現実の実景をもって結ばれている。この変化は、彼女自身の感情的起伏の反映だと考えてもよいだろう。また、「舟人笑指攝山遙」という句に注目してみると、舟人にとっては、撰山はたしかに遙かに遠いにせよ、彼女にとっては、そこはこれから楽しみにしている旅の目的地にはかならない。このさりげない一句からも、彼女の期待と冒険心とを窺うこ

とができるのである。なお、川の波の「紫」、葦の「白」、海の霞の「紅」、空の「緑」といった鮮明な配色も、彼女の精神の高揚を表しているかのようである。そしてこの明るい色彩によって、自然の生命力に溢れた江南地方が描き出されているのである。つまり、彼女の紀行詩は単なる自然の景物の再現であるだけでなく、作者の生き生きとした心の動きの表象でもある。だからこそその詩は明るく伸びやかなものとなっているのである。彼女の紀行詩の第一に指摘できる特徴は、この自由放逸と言ってよいほどの明るさである。この自由奔放な才能と豊かな想像力こそが、読者に快感を与えるのである。

次に挙げるべき特徴は、自然の響きと動きに富み、時には巧みな雕琢が施された詩句ということである。例えば、『詩鈔』巻五「水樂洞」詩において、彼女は次のように詠じている。

太古無宮商 聞泉似聞樂

太古 宮商無きも 泉を聞けば楽を聞くに似たり

千秋無賞音 此淵終不涸

千秋 賞音無きも 此の淵 終に涸れず

幼讀坡仙詩 即欲窮斯壑

幼きより坡仙の詩を読み 即ち斯の壑を窮めんと欲す

今秋事幽討 不憚徑竿确

今秋 幽討を事とし 徑の竿确たるを憚らず

蒼巖肖巨獸 猙獍勢尤卓

蒼巖は巨獸に肖て 猙獍として勢い尤も卓れたり

策杖俯餘筈 雲墩暗中作

杖を策きて 餘筈に俯けば 雲墩 暗中に作る

更聆虚寶音 金石相交錯

更に虚寶の音を聆けば 金石 相交錯す

冷泠悅塵耳 不覺日西落

冷泠として塵耳を悦ばしめ 日の西に落つるを覚えず

この詩には、好奇心を抑えきれずに、杖をついて深い谷を見下ろし、楽しんで水の音に耳を傾け山水に陶醉する彼女の姿が鮮明に描き出されている。この点は、先に指摘した、彼女の詩が遊るような生氣に溢れているという特徴と同じである。そしてこの詩にはまた、軽やかで響きのよい言葉を使うことによって、自然のなかを流れている清冽な音を想像させ、読後に嫵嫵たる余韻を残している。このような自然の動きと響きとを表現した巧みな詩句は、以下に挙げる詩の中にも見て取ることができる。

○沙渚模糊辨 齋鐘斷續撞 亂泉通衆壑 隨處聽淙淙

鮑之蕙の生涯とその紀行詩

沙渚 模糊として辨じがたく 斎鐘 断続して撞く 乱泉 衆壑に通じ 随处に淙淙たるを聴く

〔詩鈔〕卷四「住徳雲精舎、紀興四首」其二

○俄聞隆隆振坤軸……濕烟迷離越峰失 烈霆震蕩吳山搖

俄かに聞く 隆隆として坤軸を振り ……濕烟迷離にして 越峰を失い、烈霆震蕩して 吳山揺らぐ

〔詩鈔〕卷五「錢塘觀潮」

以上に掲げた詩句は、実は慎重な推敲を重ねた上で緻密に配置されたものであらうと思われる。なぜそう言えるのか。彼女はかつて「欲寫西施真貌出、含毫幾度坐更闌（西施の真貌を写し出さんと欲し、毫を含み幾度か更闌に坐す）」〔詩鈔〕卷五「湖樓即事二首」其一」と詠じている。西施とは杭州西湖の謂である。含毫は筆をなめるの意であり、転じて文章に思いをこらすさま。この詩句から、彼女が自然の本当のありさまをできる限り描き出すために、作詩に努力を傾注していたことは明らかであろう。

最後に注目したいのは、紀行詩に表われている彼女の人生観である。仕途の挫折を味わったことのない鮑之蕙にとつて、山水とは、多くの男性詩人にとつてそうであるような、精神的な傷みや生活の苦難への慰撫を与えてくれる場所ではなかった。では、いったい彼女にとつて旅で接した自然や、それを記録した詩作は、どのような意味があったのか。『清娛閣詩鈔』卷五「偕軻齋遊天平山」詩では次のように言う。

嗟乎人生樂事不易求 光陰百歲如奔流 修名未立身已老 …… 他日能完偕隱心 埋骨茲山願應足

嗟乎 人生 樂事は求め易からず 光陰百歲 奔流の如し 修名未だ立たずして 身已に老ゆ …… 他日能く偕隱の心を完うし 骨を茲の山に埋めれば 願ひ心に足るべし

まず彼女は「人生樂事不易求」と嘆いた後に、女流詩人としての立身出世の願望を徹底的に諦めようとしているらしい。このような心の叫びは、もっと自由に個人の生を謳歌しようとする彼女の意志のあらわれと考えてもいいだろう。こうして見ると、彼女にとつて自然はただ觀賞し楽しむ対象であるのみにとどまらず、その中で、自己の本心に忠実に、かつ夫と共に生活しようとする場だったのである。彼女はこのような生き方には実は価値があるのだと歌っている。こうした快樂の追求と自由人としての柔軟なモラルの探求とを詠じた詩は、明らかに明末以来の

特に江南に顯著な自由な時代精神を承け継いだものである。

更に『詩鈔』巻四「話山亭示兒子澧」詩において、彼女は話山亭から鳥瞰した優れた風景を描写した後に、

呼兒事幽討 一覽開塵容……窮達非所知 但求明德崇 試看古傳人 何分士與農

児を呼びて 幽討を事とせしむ 一覽すれば塵容を開く……窮達は知る所に非ず 但だ明德の崇きを求むるのみ 試みに看よ 古の伝人、何ぞ士と農を分たんや

と言っている。

彼女はここで、悠々自適たる農夫（隱遁者）の奥ゆかしい美德は、仕進を齷齪と求める文人を凌駕するものだと子供に訓え示している。つまり、矮小な人間社会の觀念や価値を超越し、すべてについて委順の姿勢をとることが、最も価値ある生き方だと彼女は考えていたのである。このような委順の思想から見れば、彼女は山水紀行詩を書くことによって、人間社会での生き方や、奥妙な自然界との融合を志向していたものと思われる。

## 五

以上見てきたように、物見遊山に明け暮れているうちに委順というすばらしい思想を発見した鮑之蕙であったが、それでは、彼女は具体的にはどのような態度で、自然の風景に親しんでいたのか。

はじめとして寒い垂雲洞に、彼女は杖をついて一步一步分け入ったり（『詩鈔』巻三「垂雲洞」詩云「我攜杖鞠躬入、雲脚四垂寒欲凍」）、華陽洞から出た時には「長嘯出壺天、松林日亭午（長嘯して壺天を出づれば、松林日は午に亭す）」と歎呼したほど、風景に没頭していた。また夕暮に天平山に登った時には「更踏懸崖覓遺跡、清磬聲聲日將夕（更に懸崖を踏みて遺跡を覓め、清磬 声声 日 將に夕ならんとす）」と詠じ、攝山の最高峰に登った時には「驂梯伶俚躡未半、十步九折行逾艱（驂梯 伶俚として 躡むこと未だ半ばならざるに、十步 九折 行くこと逾いよ艱し）」と語っている。

以上から、鮑之蕙の自然を賞する姿勢がいかなるものであるかが、ほぼ明らかになったであろう。どんなに険し

い道、いかなる危険な断崖絶壁であつても、かまわずに進んで行くという彼女の行動は、教養ある婦女としては、殆ど常軌を逸したものに近い。筆者は彼女以前の全ての女流詩人の詩集を読んだわけではないが、これまで調べた限りでは、鮑之蕙以前に、これほどまでに生々と「遊」に没頭している女性の姿を描いた紀行詩は、恐らく無かつたであろう。このような作品の背後には、清代の知的女性の尽きることにないエネルギーと冒険心の高まりとが、まぎれもなく存在していたのである。

その旺盛な活動性から見れば、彼女の旅行は、現在というレジャー、余暇活動などと似たところはあつたものの、本質的にはまったく異なつたもののように思われる。というのは、彼女のそれは、ただ単に時間と金銭の余裕があるからというのではなく、かといって健康のためにというものでもなく、一言で言えば、彼女の旅の目的は自己の心の満足を求めることであつたからである。「遊興復栩栩(遊興 復た栩栩たり)」「(『詩鈔』卷四「幽居」詩)と自ら言うように、彼女の異様なまでの山水への執着は、自らの心の「興」を抑えきれない衝動に由来していたのである。

ところで、彼女の紀行詩に対して、同時代の清朝乾嘉期の文人は、どのような評価を下していたのだろうか。李錫恭(字は協襄、号は衡堽。)は『詩鈔』の序文に次のように言う。

凡集中流連光景、憑眺山水諸作、無一語涉香奩體、無一字染脂粉氣、平和渾雅、化雕鏤之跡、而一歸自然。

凡そ集中の光景に流連し、山水に憑眺する諸作は、一語として香奩体に渉る無く、一字として脂粉の氣に染まら無く、平和渾雅にして、雕鏤の跡を化して、一に自然に帰す。

すでに指摘したように、紀行詩において鮑之蕙が描き出している自画像は、真率不羈、冒険心に富んでいるというイメージである。こうした自由放逸の態度を飾ることなくそのままに表現した作品は、おのずから香奩体の如き柔弱鄙俗な氣風に染まることはなかつたと言えよう。思うに、鮑之蕙は一人の閨秀詩人でありながら、積極的に詩の内容と詞藻との両面から、従来長く濃艶柔弱なものとされてきた「女性的」な詩風を脱却しようとしたに違いない。その上、技巧を凝らし、雕琢を加え、また一方ではその雕鏤の痕を残さないようにも努めていた。このようにして、やがて彼女の独自の作風が確立されていったのである。

## 終わりに

以上、鮑之蕙の生涯とその文学活動の実態に迫りながら、主として彼女の紀行詩の特徴と、自然に接する姿勢に焦点を当てて論じてきた。

彼女の紀行詩には、日常生活から解放された喜びが随所に見られ、豊かな自然の響きに充ちているという特徴がある。とりわけ、彼女には山水に藉りて政治を批判するのではなく、純粹に旅行に耽嗜し、その悦楽に浸りきっていたのであるから、そこに描かれた山水は、徹底した明るさを有している。

このような心底からの自由を得た女性の旅を記した文学が、なぜこの時代に生まれたのか。それは当時の社会的背景と深くかわりがある。

明末以後、個人の欲望にもとづく自由な生き方を求める思想が生まれた。それによって、文人士大夫の間には、仕進に汲々とすることなく、心ゆくまで享樂的生活を追求しようとする傾向が一挙に広がりを見せた。特に江南地方では、經濟發達による生活上のゆとりという要因も加わって、物見遊山、芝居、書画骨董の樂しみに耽る文人たちが続出したことは、ここで改めて述べるまでもない。例えば、明末の張岱、祁彪佳、清代の李漁、袁枚らの生き方は、いずれも脱権力を志向し、ひたすら精神の快樂を求めようとするものであった。

本文で取り上げた鮑之蕙は、このような社会的風潮の影響のもとで、夫の張鉉に連れられ、旅の體驗を得ることができたのである。そのほかによく知られた例として、『儒林外史』の作者吳敬梓（一七〇一―一七五四）は、妻の葉氏を連れて「踏青」（ハイキング）に出かけている。また沈復（一七六二―？）の『浮生六記』には、愛妻陳芸とともに旅行した記録が残されている。彼女らの旅行活動は、纏足が必ずしも婦女の行動上の障害になるとは限らなかったということを証明している。更に清代の女性の生活様態が単に靜態的であったばかりでなく、意外に行動的なものでもあったことの裏付けともなるであろう。

このように、旅行をはじめ、著名な詩人袁枚に師事すること、詩会に参加すること、詩文の売買により自活する

ことなどといった様々な清代の知的女性の実像は、彼女らがいずれも自己の内部に閉じこもることなく、社会に向かつて拡張してゆこうとする意識を持っていたという事実を示している。清代における才媛たちの社会進出は、前代に比べて顕著に、またより多様なものとなっていたのである。

従来、例えば陳東原の『中国婦女生活史』は次のように指摘する。「我門有史以来的女性只是被摧殘的女性、我門婦女生活的歴史、只是一部被摧殘的女性底歴史（我が国の有史以来の女性は、ただ虐げられる女性ばかりであった。我が国の婦女生活の歴史は、ただ虐げられる女性の歴史であるにすぎない）」。確かに男尊女卑の中国社会では、女性の抑圧や悲惨を示す事例や資料は数多くある。しかし、清代の女性の多様な生活実態を理解すればするほど、中国の女性が生きたすらすら抑圧され、常に受動的のみであったという被害妄想的史観とも言うべきものへの根本的な見直しが必要であるように思われるのである。

というのは、鮑之蕙の山水紀行詩及び旅そのものが、清代の女性の限らない知識欲と文筆力とを証明するものであり、またすぐれた生活力と行動力を備えた女性の生きた姿を如実に伝える何よりの証左であるからである。

注

(1) 鮑之蘭の『起雲閣詩鈔』巻三「感懷五首」其四の「載瞻課選樓」という詩句の下に「先徵君藏書樓名」という注がある。

(2) 明末以後、女性に対する詩文教育は、経済的に豊かな江南のエリート家庭の間では容易に見られるようになった。そのため、女性詩人を何人も出した家も少なくなかった。例えば、明代では『章氏六才女詩集』に章有淑・有湘・有潤・有閑・有澄・有泓の六名の才媛の詩が収められているが、彼女らは皆章簡の娘である。また『雙燕遺音』の作者である張引元・張引慶姉妹、閩秀詩人の沈宜修、及びその三人の娘、葉純純・葉小鸞・葉小純などは、共に才女として高名である。清代では、袁枚の妹袁機・袁杼・袁棠が詩に長じており、『袁氏三妹詩稿合刻』がある。袁枚の女弟子の一人孫雲鳳は、妹の雲鶴・雲鸞・雲鴻・雲鵠・雲鷗とともに閩秀詩人であった。同じく袁枚の女弟子である陳長生の



- 妹は弾詞『再生縁』の作者陳端生である。更に中国清代とほぼ同時期の日本の江戸時代にも、やはり数多くの知的な女性が活躍している。そのなかには、姉妹ともに女流詩人や画家となった例もいくつか見られる。門玲子氏著の『江戸女流文学の発見』（藤原出版社 一九九八年）二三九頁には「片山九碗（一七七七～一八三六）、…九碗の姉妹はいずれも文学を好んだ」とある。また池田明子氏著の『頼山陽と平山玉蘊』（亜紀書房 一九九六年）によれば、平山玉蘊（一七八七～？）とその妹玉葆（一七九一～？）はともに画家であった。
- (3) 『詩鈔』巻頭の李錫恭の序文による。
- (4) 『詩鈔』巻頭の鮑之鍾の序文に「及笄、適同邑張舸齋司馬、舸齋性倜儻、工詩、喜遊覽。」とある。
- (5) 『隨園詩話補遺』巻八の六十五に「夫婦能詩、古今佳話、近今如張舸齋與鮑菑香、尤其傑出者也。」とあり、王文治『夢樓詩集』巻十八「舸齋圖歌為張翊和作」詩の注には、「翊和為鮑步江女婿、妻亦工詩。」とある。
- (6) 『詩鈔』巻頭の趙懷玉の題辭による。
- (7) 張鉉の「贈隨園太史」詩は、『續同人集』「投贈類」所収。
- (8) 『詩鈔』巻二「祝隨園先生八十壽同舸齋聯句」詩に「壬子秋蒙賜清娛閣合刻詩序」という注がある。なお、この詩は『隨園八十壽言』巻六にも収められているが、辭句に少し異同がある。
- (9) 『隨園詩話』巻二の四十九・五十、巻五の十七、巻九の四、巻十四の二十五・八十六、同『補遺』巻五の四十。
- (10) 『詩鈔』巻二に「隨園先生見惠翠柏、黃楊二盆、走筆奉謝」詩がある。また巻三「和隨園先生越遊得女弟子五人喜作元韻」詩に、「先生以盆柏並隨園全集見惠」という注があり、巻三「隨園先生輓辭」詩に「甲寅秋先生以古柏、鮮荔見惠」という注がある。
- (11) 徐媛の『絡緯吟』は、現在日本の国立国会図書館に所蔵されている。
- (12) 『西洋人の見た十六～十八世紀の中国女性』（矢沢利彦氏著 東方書店 一九九〇年 二十六頁）。
- (13) 金山は今の江蘇省鎮江市にある海拔六十メートルの半島で、焦山と対峙している。有名な金山寺は南朝の時にこの島に開かれた。
- (14) 『蘇軾詩集』巻十二「東陽水樂亭」詩をいう。

鮑之蕙の生涯とその紀行詩

- (15) 『清娛閣詩鈔』卷三「華陽洞」。
- (16) 『清娛閣詩鈔』卷五「偕軻齋遊天平山」。
- (17) 『清娛閣詩鈔』卷四「九日同軻齋登最高峰」。
- (18) これ以外の「輿」という語を含む詩句には、次のようなものがある。『詩鈔』卷五「西湖四首」其一に「遊人不飲輿先酣」。同卷「雨中同軻齋泛湖聯句」詩の「細雨斜風輿不孤」。同卷「曉晴買舟看霜葉」詩の「維舟乘輿過南屏」。同卷「遊華山」詩に「徧覽仙蹤輿尚能」と。
- (19) 『中國婦女生活史』(陳東原著 台灣商務印書館 一九三七年 十九頁)。